

たかさご史話 ⑤

〜平安末期の高砂泊とまり〜

後白河法皇を幽閉して政治の実権を握った平清盛は、翌治承四年（一一八〇）、言仁ときひと親王（安徳天皇）の即位を強行しました。その年の三月から四月にかけて、後白河院の子の高倉上皇（十九歳）は、安芸厳島神社に異例の行幸を行います。その旅の様子を、上皇の近臣源通親みちちかの記した「高倉院厳島御幸記」でみてみましょう。三月二十一日まだ夜が明けやらぬ頃、最初の宿泊地福原京（神戸市兵庫区）を出発した一行は、須磨浦を経て山陽道を西進し、淡路島を望む播磨国山田で昼食をとります。この間、輿こしに乗った高倉院は、通過する場所についてくり返し通親に尋ねています。歌枕の地名が多いこのあたりは、京都の住人である若き上皇にも関心深い場所だったことがうかがわれます。そして、申刻さるしゆく（午後三時から五時ごろ）一行は、高砂に到着しました。

ここに、平安末期の高砂港の様相を示す興味深い記述が

あります。高砂泊とまりは、複数の小さな入り江から構成されていた様で、その浦々には多くの小舟が停泊していました。上皇の「御舟」は、清盛の乗ってきた唐船とともに回漕されてきました。高砂泊に係留しようとしたものの、「葦深くて」接岸できませんでした。そこで、三隻の「はしけ」をつないで「御輿」を「御舟」に移したというのです。つまり、この時期の高砂泊は、加古川河口（当時）から出た土砂によって中州が形成され、大型船の使用には浚渫しゅんせつなどの再開発が必要であったことがわかるのです。

（高砂市史編さん専門委員
梶木良夫）

